

書 評

田仲 一成著
『中国演劇史』

周 美華*

本書は、東アジアを研究する者なら是非手がけたいテーマと視点の書である。しかし、整理分析するにはあまりに複雑で、生半かな知識ではとても書けるものではない。長年に渡り、数多くの広範囲な優れた研究をされている田仲先生だからこそ、成しえた成果である。座右において、繰り返し目を通し、研究の手引としてたい名著と言える。

本書は、次のように構成されている。

目 次

序 論 視点と方法

第一章 演劇発生の構造

序 節 卿村の祭祀儀礼の芸能・演劇への転化

第一節 神霊降臨の祈福儀礼—巫覡による憑依演出・福神舞踏の慶祝劇への転化

第二節 驅邪・逐疫の攘災儀礼—卿民による儺神武技の角觥戯・武戯への転化

第三節 孤魂・冤魂に対する鎮魂儀礼—僧侶・道士による祈伏儀礼の悲劇への転化

第二章 演劇発生の萌芽

序 節 歴史的過程

第一節 慶祝劇の萌芽

第二節 角觥戯・武戯の萌芽

第三節 鎮魂演劇の発生

第三章 巫系舞劇の伝承

序 節 追儺系仮面舞劇—演唱詞話・詩讚系舞劇の伝承

第一節 卿儺の舞劇化

※筑波大学地域研究研究所

第二節 堂儺の舞劇化

第三節 市儺の舞劇化—灯戯図巻

第四章 元代演劇の形成

序 節 元代楽曲系戯曲の成立環境

第一節 卿村祭祀に由来する元代雑劇

第二節 宗族祭祀に由来する元代雑劇

第三節 市場地環境に由来する元代雑劇

第五章 明代演劇の変質

序 節 元明間、南方中国の演劇環境

第一節 卿村演劇の体制指向

第四節 宗族演劇の雅曲指向

第六節 市場地演劇の俗曲指向

第七節 明代戯曲脚本の階層分化

第六章 清代演劇の展開

序 節 清代祭祀演劇の環境変化

第一節 卿村演劇の再編成と復興

第二節 宗族演劇の隆盛

第三節 市場地演劇の整備

第四節 清代戯曲の傾向

第七章 近代興行演劇の成立

序 節 演劇の移動と伝播

第一節 地方演劇の都市流入と会館演劇

第二節 都市戯園の成立—秘密結社の背景

第三節 乱弾系演劇の繁栄

結 語 中国演劇の現段階

ここでは、本書のすべての内容に触れることができないが、歴史・文化人類学・民俗学に対する著者田仲先生の研究姿勢を吸みとりながら、いくつかの特徴的な部分について触れようと思う。

序論「視点と方法」ではまず中国演劇史の研究は、約百年の歴史を有するが、その視点は主として宮廷や伎院の俳優の演ずる都市の演劇に向けられており、農村の演劇に向けられたことはほとんどなかったことにふれている。中国の演劇、戯曲の精華は教養ある文人の手に成り、宮廷、伎院の俳優によって演ぜられた雅曲にあるとされ、農村や市井俳優によって演ぜられる農村の演劇は、文学的な価値のない“地方劇”として軽視され、戯曲史

の中では付随的な扱いを受けてきたにすぎない。

この点は、西欧や日本の演劇の研究において、農村の演劇が都市の演劇を生み出した母胎として重視されてきたのとはまったく異なる。もっとも中国においても、1960年前後には人民文学の視点から“地方劇”が注目され、地方劇テキストの整理が行われたが、必ずしも地方色そのものを尊重せず、方言を共通語に改めるなど、従来の中央中心、雅曲中心の視点は変わっていない。また、“地方劇”という言葉にも曖昧な点があった。それは地方社会の演劇を都市部と農村部を包摂する形で表現する言葉であり、ややもすると、地方の省都た県城の演劇に重点を置いて用いられるケースが多く、必ずしも農村演劇を一義的に指すものではなかったのである。

このような研究状況を対して、著者は農村演劇の本質として、農村の祭祀儀礼と結合し、その一部として演ぜられる演劇という点に着目し、これを「祭祀演劇」という言葉によって限定して、この視点から中国演劇史を研究された。分析が分かりやすい、論拠が厳密だし、また、世界諸国の演劇史との対比に於いて見る場合、この祭祀演劇、特に巫術と結びついて演ぜられる巫系演劇を中国演劇の原点と見る角度から中国演劇史を再構成する必要があると出張された。

本書では、近年の状況を踏まえながら、現地の新資料を先行文献と結びつけることによって、新しい道を打開し、祭祀演劇の角度から中国演劇史を再構成することになった。

第一章「演劇発生の構造」は中国の卿村社会においてもっとも原初的な祭祀は、村落の守護神としての土地神つまり“社”の神を祭“社祭”である社祭には、春に社神に対して豊穡を祈る“春祈”の社祭、明きに社神に対して豊作を感謝する“秋報”の社祭の二種類に分けている。第二節で述べた如く、江南の卿村には追儺系の武技、角觥戯が伝承されてい

る。それらは、農村の祭祀と結びついて維持されてきた点から見て、宋元以前から卿村社会に根を下ろしてきた可能性が高い。農村における演劇の発生を考える場合、この追儺系の武技、及びそれに伴う演唱芸能の歴史展開の過程を考察する必要がある。今、卿村の現状からこの種の追儺系芸能の特徴おまともてみると、次のようになる。農村の季節祭祀に際して舞台を作らず、地上で驅邪逐疫を目的として演じられる；演技者は武将仮面を着け、鬼を威嚇する；演技者はは大刀、長剣、短剣、などの武器を振り回し、武術を顕示する；音楽は銅鑼と太鼓によるリズム音楽に限定される；物語を演ずる場合、歌唱者は七言句をれ連ねた詩讚体といわれる詩曲を演唱する；歌唱者は歌唱のみ、演技者は演技のみの分演形態であったものが、演技者も演唱に参加するようになったものとみられる。演劇もまたこの卿村の二種の社祭儀礼から発生してきたものと考えなくてはならないだろう。

第二章「演劇発生の萌芽」はまず歴史的過程を溯っている。古代の春の社祭について、記録が乏しいが、豊穡儀礼と青年式の通過儀礼を兼ねた年齢集団の祭、或いは嫁選び、婿選びの祭であったはずであるから、族外婚制を取る中国では単一の同姓村落でなく、通婚関係にある数個の村落が共同して行ったと見られる。要するに中国の卿村祭祀における英霊、冤鬼の鎮魂儀礼は北宋期において、演劇への転化の萌芽段階に到達していたと思われるのである。

第三章「巫系舞劇の伝承」では上で述べた特徴を持つ演唱芸能・追儺系舞劇（中国では「儺舞」あるいは「儺戯」と称している）について歴史的に考察している。社会的に見ると、この種の芸能の組織形態としては、卿村社会を基礎とした最も基層的な「卿儺」と、卿村の宗族体制が固まった宋元以降、富裕家族がみずからの家堂に演技者を招いて行う「堂儺」、更に農村市場において発達した「市儺」

の脚村の舞劇化，堂儼の舞劇化，市儼の舞劇化の三種の形態を区別して概観された。

第四章「元代演劇の形式」では仮面武技についてふれている。仮面武技を行う者が農民自身であるが，そこで神神が天界から下界に降臨し，村を訪れ，農民（巫覡）に憑依して神託をつけたり，鬼を追ったりする。これは神神の所作であり，それ自体がそのまま仮面のパフォーマンスになっている。都市を根拠地に周辺村落を遍歴する路岐，散落は当初は巫術の専門家として村落祭祀，孤魂祭祀に招かれて楽曲系の儀礼を演じ，後には神を楽しませる演劇の専門家として神人共楽の場に招かれて楽曲系戯曲を演じた。その勢力は，富裕村落や，市場において，古い詩讀系舞曲を圧倒して盛行するに至る。

第五章「明代演劇の変質」では宋元以来の脚村祭祀演劇の中に存した英霊怨霊の鎮魂，怪力乱神の要素が，明代初期以来，脚村の宗族地主層，及びそれに連なる知識層クラスの劇作家，劇評家の世界から影を薄くしていったことをとりあげているが，このことは，江南脚村社会において宗族体制が強化されてくると深い関係がある。ただし，この傾向は社会演劇，宗族演劇，市場地演劇の三種の場面で，それぞれ異なった現れ方を示している。

第六章は「清朝演劇の展開」である。明朝末期から清朝初期にかけて，脚村演劇が衰退し，宗族演劇と市場地演劇が隆盛に向かう傾向である。このことは，脚村演劇を統制してきた脚村の宗族地主層にとって，脚村演劇に対する支配権力の喪失を意味するものであり，脚村秩序の崩壊に導かれる危険性が生じた。そこで清朝も安定期に入ると，脚村地主層はまずこの脚村の演劇に対する統制権力を再び握り直す努力を始める。その結果，清代中期以降，脚村演劇は脚村の宗族地主の主導の元で，財政基盤や組織が強化され，明末に一時荒廃した脚村演劇がある程度復興していく形

勢を示す。また，宗族レベルでは，地主層により，宗族演劇の体制強化がはかられる。この章では清朝を通じてみると，宗族演劇と地主層の支配下にある大部分の脚村演劇は制度的に安定した基礎の上に，4大南戲などの古い道徳的演目を繰り返す傾向が強いものに対して，市場地演劇と下層農民の主導権の下にあるこの時代の後半に盛んになる各地の英雄武劇を中心とする地方劇は，このような市場地演劇と脚村演劇を背景として登場してきたのである。本章においては，この点を中心に清代における演劇環境の変化とこれに対応する地方劇の分化，展開について，論じられた。

第七章は「近代興行演劇の成立」である。清朝後期以降，地域社会内部にも社会層の間の移動性が高まり，地域間の交流も盛んとなってくるにつれて，これらの地域的祭祀演劇にも地域への移動，伝播が生ずるに至る。その移動の条件は宗教演劇，市場演劇は，広い範囲に早い速度で全国の都市に伝播するが，士人商人など外省人に依存するため，その持続性，定着性は弱く，消滅しやすい。これに対する脚村演劇は，府県レベルの狭い範囲に緩慢に伝播するにとどまるが，本地人に依存するため，持続性があり定着しやすい。これらの演劇が都市に流入してくるとき，それぞれの特徴を反映してきた。

結語は「中国演劇の現段階」で，既に都市の戯園を中心とした近代化の方向にいているが，中国大陸の脚村には，まだ祭祀演劇の伝統が残っており，そこでは発生期以来の脚村祭祀演劇の二大潮流である英雄劇への脚終愁も生きている。最近，政府の演劇政策が許容する範囲では，祭祀演劇の核心である。目連戯や儼戯も，不完全ではあるが，部分的に復活上演されることがある。今後保護されるべきであることを出張された。

後書きにあるように，著者は東京大学東洋文化研究所に勤めた時，中国の演劇に関する研究を今まで何十年に渡って積み重ねられた。

多方面・多地域の資料収集と細緻な分析・研究の成果が本書と言える。「祭祀演劇の角度から中国演劇史を再構成したい」という意図はここにみごとに結実している。「通史」の体裁を取った本書は研究の上では特に見るべき進歩があっただけではなく、基本的に構想と言う点では、前者で提起した枠をでていない気がする。

本書は極めて幅広い問題を扱いながらも、中国本土以外に、香港、台湾、東南アジアなどの事例から取り上げられた。個々のテーマに向かう著者の研究姿勢は一貫した課題意識に裏付けられており、今後の日中間での歴史文化人類学・民俗学的研究にとって大きな示唆となるものであろう。

参考文献

- ・田仲 一成著 『中国祭祀演劇研究』 東京大学出版社 1981

神野 善治著

『人形道祖神—境界神の原像—』

石本 敏也*

人形を作り、祀る風習は、日本各地に広く分布し、その信仰は多種多様で非常に複雑な様相を呈している。私事で恐縮だが、私は卒業論文で新潟県東蒲原郡の四地域に伝承されている「ショウキサマ」という藁人形を扱った。境に立つその巨大な姿は見るものを圧倒させ、思わず他者を引き込む魅力を持っていた。これらの人形については、戦前に幅広くまとめた柳田国男の「神送り与人形」を始め、多くの研究がなされているが、その中、本書は、徹底的にこの民間信仰の分野を具体的な「カタチ」に示される「モノ」に注目して把握しているところに大きな特徴がある。本稿では、

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

この神野善治の『人形道祖神 境界神の原像』の書評をすると同時に、若干の私見を述べてみるものである。以下、まず本書の構成を示し、概要を見ていきたい。

序 問題提起と研究方法

第一編 村境の大人形 東北日本の人形道祖神

第一章 藁人形探訪 人形道祖神論への試み

第二章 人形道祖神の諸相 (I) 藁人形の形態と呼称

第三章 人形道祖神の諸相 (II) 藁人形から木像へ

第四章 人形道祖神の諸相 (III)

第五章 人形道祖神の変容

第六章 東北日本の人形道祖神の特質 第一編のまとめ

第二編 小正月の道祖神祭り与人形 もう一つの人形道祖神

第一章 門入道と家ごとの人形道祖神

第二章 村ごとの人形道祖神

第三章 石像道祖神を焼く習俗

第四章 家々を巡る人形道祖神

第五章 道祖神を焼く意味

第六章 神像への変容 人形道祖神の恒常化と石像道祖神

第七章 小正月の人形と道祖神 第二編のまとめ

第三編 道祖神像の成立

本編の概要

第一章 人形道祖神と道祖神信仰の歴史

第二章 人形道祖神の二類型

第三章 問題点と今後の課題

補論 海外における人形道祖神の類型

一 朝鮮半島の長J (チャンスン)

二 中国・タイ国少数民族に見る境界神の人形

以上が、本書の構成である。これだけ見ても、筆者がいかに長い時間をかけて、一つひとつ自分の足でこの「人形道祖神」という類型を